



## 中村 水音 (なかむら みおと) 松が谷中 3年生

作品名: 問題と戦う

図 書: ぼくらの七日間戦争

外交問題や不景気、紛争や汚職事件、殺人事件など、世界は今、たくさん問題をかかえています。解決しようと動く人もいる一方で、問題の引きがねとなっている人物や、グループもあります。そんな社会に不安を感じている中学生をテーマにしたのが、宗田 理さんが書いた、『ぼくらの七日間戦争』です。舞台は東京の下町です。主人公の英治が、友人の相原と、ある計画を立てます。夏休みが始まってすぐ、近くにある廃工場に中学生だけでこもり、「解放区」を作ろうというものです。解放区とは、大人や社会から離れた自由な場所のことです。ガリ勉、絵の天才、ケンカの達人など、個性豊かなメンバーが立てこもり、親に直接悪口を言ったり、先生に頭からペンキをかけたりと、たくさんのイタズラを仕掛けます。そんな登場人物たちの、解放区が破られるまでの七日間の戦いを描いたストーリーです。

この本を最初に読んだのが、小学校六年生のときでした。友達が読んでいるのを見て、「自分も読んでみたい。」と思ったのがきっかけでした。そのころはただ面白くて読んでいただけでしたが、中学生になった今、社会問題について考え直すため、読み直してみることにしました。この本に出てくる登場人物は、それぞれ事情をかかえています。その一人一人が、現代社会の鏡なのではないかと思ったからです。

主人公の英治は、父が一流の大学を出て、会社に入ってからエリートコースを歩んできたため、両親からの「自分の子供もそうになって欲しい」というプレッシャーがのしかかっています。これに似た境遇のメンバーが何人かいて、両親に反抗心を持っています。今の中学生の中にも、同じような立場の人がいるのではないのでしょうか。ぼくの友達にも、そのような人がいます。本人の意志に反して、とにかく勉強ばかりやらされているそうです。「自分はこれでいいと思うか。」と問うと、大抵の人は、「大切なことだとは思いますが、今みたいにやりすぎるのは正直言って違うと思う。」と答えます。勉強することは、将来多くのことを学ぶための準備であり、重要です。しかし、勉強ばかりしていることが、大人になって役に立つかどうかは分かりません。

登場人物の中には、政治的な事情をもつ人物もいます。堀場という女子は、市内の金持ちで父が有力者です。しかし、裏でさまざまなことを行っている父に反発しています。これは、現在の政治に対する筆者の反発でもあると思います。二〇〇九年に発覚し、小沢民主党代表が、西山建設の政治団体から政治献金を受けとったと

して逮捕された、「西松建設事件」など、現在さまざまな汚職問題が浮かび上がっています。堀場は、そういったことの不安の代弁者なのです。

家庭的にも、政治的にも、社会には多くの問題が残っています。しかしぼくたちは、いつか今の大人からそれらを引き継がなければなりません。社会の一員として世の中に出なければならぬのです。主人公の周りには仲間が、それに気づきながらも、独自の形で社会の中に入る準備をしています。谷本という男子は、工学系に進もうとしているし、他にも、グラフィックデザイナーを目指している人や、料理人になろうとしている人がいます。次世代をになうぼくたちは、自分が何をすべきか考えることが大事だと、彼らが教えてくれました。

しかしぼくらの世代の人々（ぼくも含めて）は、そのような社会的な問題から目をそらしがちです。一番身近なところと言えば、「先生との関係」です。この本にも、テーマの一つとして取り上げられています。「この先生は嫌いだ。」などと思い、友達との間で悪口を言ったりすることは、ほとんどの中学生が経験したことがあると思います。もちろん、完璧な人はいませんから、好き嫌いがあるのは当たり前のことです。しかし、悪口を言っているだけでは、何の解決にもなりません。嫌いなら、なぜそうなのかしっかり考えて、その先生と話し合ってみることも必要だと思います。登場人物たちのように、行動を起こすことが重要なのです。

登場人物たちがやったことは、過激で、たくさんの人に迷惑をかけたので、正しいとは思いません。それでも、自分が問題だと思ったことを、解決しようとする力が、ぼくにとって大切になると思います。少しでも多くの問題に取り組めるようにしたいです。